

ホリセンと学ぼう

いま  
なぜ現在【総合探究科】か?  
明星の教育に光を当てる

明星学園をささえる会(後援会)主催

第1回

トーク&スタディ 記録

講師：堀内雅人先生(中学校副校長)

日時：2018年6月30日(土)

14:15 開場 14:45~17:00

場所：いちょうのホール





明星学園をささえる会（後援会） 主催

## 第1回 トーク&スタディ

# 『<sup>いま</sup>なぜ現在「総合探究科」か?』

—明星の教育に光を当てる—

講師：堀内雅人（中学校副校長・国語科）

日時：2018年6月30日（土）14:15 開場 14:45~17:00

\*この記録は、当日の発表に、時間の都合で割愛した部分を含め、まとめたものです。

### 1. あいさつ

中学校副校長の堀内です。先日、中間テスト後のテスト休みの日、職員室にはたくさんの教員たちが採点の仕事をしていましたが、校舎に生徒の姿はありません。それなのに、誰かの笑い声が聞こえてきました。何人かの教員が廊下に出てみると、小さな小学生の女の子が4~5人、階段を2階に上っていきこうとしているのです。「どうしたの?」と聞くと、どうやら7年生にあこがれの先輩がいるようなのです。彼女たちを2階の教室まで付き添ってあげた教員によると、昨年小学校に入学した時、自分たちをやさしくお世話してくれた6年生がいたということです。それから1年たち、その先輩がどんな教室で勉強しているのか、探険気分中学校の校舎まで来たんですね。彼女たちは、先輩にお手紙を書いてもどっていきました。

今月は、教育実習の月でもありました。実習生にとっては授業の準備から日々の記録をまとめることなど大変忙しい3週間ですが、中学生にとっては目の前の彼らを見ながら、数年後の自分を考える大変貴重な機会にもなっているようです。大学4年生にとって中学生は、自分が9年生だった時に運動会で面倒を見た小さな小学生なんですね。これが12年一貫の明星学園の良さでもあります。いろいろなところにつながっているんですね。今日のこの場も、小中高の保護者の皆さん、卒業生やその家族の皆さん、入学を希望されている方々に至るまでさまざまな方々にお集まりいただきました。このような形でお話しさせていただく機会を与えていただき、本当にありがとうございます。

### 2. 新教科「総合探究」

黄色の小さなリーフレット「総合探究科」をご覧ください。今年度より、新教科「総合探究」が誕生しました。7年では「哲学対話」と「図書館と情報」という授業が、それぞれ1コマずつ時間割に入り、全員が受講することになります。

「哲学対話」では、問いを出し合い、一つの正解というもののないテーマについて対話を行います。世の中の大切な問題というのは単純なものではありません。立場により、文化により価値観も異なります。そんな多様な者同士が共同しながら創造的な生活をしていくためには、（もちろん一人で生活することなどできません）、他者と対話しながら共通の価値を探り出し、していく力がこれからの時代、ますます求められるようになるでしょう。この授業については、「哲学対話」をさまざまな場所で実践、研究している2人の研究者に私が加わり、1クラスを

3人で担当しています。後ほど具体的なお話をします。

また、「図書館と情報」では、情報の扱い方や調べ方から発信の方法などを学習します。現代はコンピューター社会であり、中学生にとってもネットは極めて身近な存在です。しかし、それは便利である反面、使い方を間違えると探究する上で大きな阻害要因ともなります。つまり、ネットの検索は、すぐにある答えが見つかってしまうのです。そこで満足してしまうと、思考の深まりは期待できません。そのことに無自覚でいると、自分に都合の良い情報だけ飛び込んでくるようになります。他者と出会わずに思考を終わらせてしまうか、あるいは一方的に他者を攻撃する方向へと進んでいく危険性をはらんでいます。この授業では、情報の扱い方を探究につながるよう、カリキュラムが組まれています。パソコンの使い方や、パワーポイントの操作を学ぶことが目的の授業ではありません。もちろん、そのような技術は発信するためのツールとして学習します。ただ数年後にそれは、また別のツールにとって代わっているかもしれないのです。この授業を担当するのは、司書の大作教諭です。7年では「哲学対話」「図書館と情報」の二つの科目を両輪として、探究の基礎を学びます。お互いを補完する科目であり、どちらが欠けてもいけないと考えています。

8年では「探究実践」という授業が、週2コマ入ります。7年での授業を基礎に、身近なテーマを共同で探究、具体的な研究手順を学習するプロジェクト型の授業を目指します。ただ、今年は1年目であり、7年で学ぶべきことを含みこんだカリキュラムで実施しています。担当は石川教諭です。

9年では「卒業研究」という名称の授業が、週1コマ生まれました。もちろん、この授業のみで研究をするわけではありません。明星学園中学校では、23年にわたり「卒業研究」を実践してきました。その要になっているのは、生徒が自らテーマを決めるということと、管理職を含め中学の教員全員が9年生を数人ずつ担当し、約一年にわたる活動を見守りアドバイスを続けるというものです。ここについては一切変更はありません。この授業では、全員に伝えたいことの確認、長い期間の研究の時間にリズムを作ることにあります。研究というのは一人の作業であると同時に、互いに報告しあい刺激しあうということにおいて、共同の取り組みでもあるわけです。この授業は、石川教諭と9年の副担任がペアを組み、ティームティーチングで行っています。

以上、簡単に「総合探究科」についてお話ししました。このカリキュラムについての提案は、新坂教諭を委員長とする特別委員会（私が加わり、繁田・長谷川・大作各教諭がメンバーです）が行いましたが、中学校の職員会議ではすんなり決まったわけではないのです。なぜだと思いますか？ どんな反対意見がでてきたと思いますか？ 外部の方に話をすると、おおむね好意的に受け取ってもらえました。「明星と言えばやはり探究というイメージですよ。これまで明星教育がやってきたことと結びつきますね」。ただ、内部の人からは、少なからぬ反対意見がありました。

その中で注目すべきだと思った中心の意見は、「これまで明星では探究型の授業を各教科でしてきたのに、なぜ今あえて時流に乗るような形で、探究科なる新しい教科を作る必要があるのか？ 教科の中でこそ探究的な取り組みを目指すべきなのではないのか」というものです。表面的には賛成・反対という対立する構図ではありますが、この対立は深い部分まで下りていくと一つの共通認識にたどり着きます。世間が少しでも短い時間に楽でたくさんの知識を覚え

させることをよしとする、プロセスよりも結果が大事なんだという風潮が主流であった時代にも（現代でも大枠では変わらないでしょう）、明星では各教科が単に一方的な講義の授業ではなく、生徒自身が自分の考えを持ち、自分と異なる他の生徒の意見を聞くことで再び考え、そこから生まれる気づきや発見を大切にしてきた、そんな歴史があります。それは数字や画像で示すことのできる類の特色ではありません。世間的には地味ではあるかもしれないけれども、教育においては本質的なことを常に意識する実践だと思っています。

一方、文科省はここにきて、指導要領の中で初めて授業の方法について言及しました。教師による一方的な伝達の授業ではなく、一人ひとりの生徒が主体的に活動できる授業を目指せというものです。多くの知識を覚えさせることよりも、思考力、コミュニケーション能力を身につけよというものです。言葉の上では、明星がこれまで主張してきたことでもあります。現場はすぐに反応します。反応せざるを得ません。各地で行われる研究会では、「生徒の主体性」「アクティブラーニング」「グローバル」「多様性」といった言葉が躍ります。新しい入試の形として、「思考力テスト」なるものも珍しくなくなりました。しかし、そんな授業を作るというのは、容易なことではありません。もともと主体的な人間がいるわけではありません。そういう生徒を育てるために学校があり、授業があるわけです。中学校3年間での彼らの成長は驚くべきものがありますが、それは常にプロセスであるわけです。にもかかわらず、研究報告ではカッコいい形が求められます。全員がタブレットを持ち、全員がタブレットに向き合っているカッコいい映像が映し出されます。失敗は許されません。その目的とは裏腹に、教員の主体性が認められない中で結果だけが求められる、そんな現場の声を外部の研究会に参加するたびに耳にします。

明星学園小・中学校が長年にわたり秋の公開研究会で提案してきたものは、カッコいい形を示すことではなく、教員自身が主体的に取り組み、一人ひとりの生徒と向き合い、悪戦苦闘するプロセスだったのではないかと思っています。だからこそ、批判を含めた意見や感想をいただくことが、それを受けとめることが教師の成長にとって最も大切なことであると思ってきました。

中学校の職員会議において「総合探究科」の新設が了解された時、確認したことは「教科の授業」をこれをきっかけにより輝かそうということでした。探究を「探究科」に任せるのではなく、全ての教科でより意識的に取り組んでいこうということでした。そのような意味もあり、教科名を「探究科」ではなく、「総合探究科」としました。そこには、他校の「探究」とは似て非なるものだという自負があります。もちろん始まったばかりであり、偉そうなことは言えません。ただ、それくらいの意気込みがあるということだけは確かだと思っています。

1年間の実践が終わったところで、それぞれの授業の担当の教員から具体的な中身を報告する機会を作っていただければありがたいと思います。今日はその前提のようなお話になってしまうことをご了解ください。「卒業研究」、今学期の「哲学対話」の授業、いくつかの教科の授業を例に、私自身の眼で観て感じたことをお話ししたいと思います。どの取り組みも、一貫して共通しているものがあります。

### 3. 9年「卒業研究」

「卒業研究」（卒業論文）の取り組みは、1996年度の9年生からスタートしました。23年の間、さまざまな変遷はありました（『明星の教育 2013』「中学校卒業研究の実践をふりかえる」に詳しい）が、常に管理職を含む中学校の全教員が担当し、テーマは生徒自身が決めてきました。自分の好きなこと、解明したいことを宣言するということは、自分と向き合うことです。先生や親の顔色を窺っては、全く意味はありません。

先日、こんなテーマを持って相談に来た生徒がいました。「どうすればテストの点数をもっと上げられるようになるか？」「いつも成績が悪くて先生たちに迷惑をかけ、すみません。この卒研で研究し、成績を上げる勉強法を見つけたいです」と言うのです。どんな声かけをしてあげればよかったですでしょうか。「薄っぺらでつまらないテーマだね！」と思わずつぶやいてしまいました。彼は、きょとんとしています。なんでそんなことを言われるのか信じられないといった表情です。「このテーマを持っていったら先生や親が安心すると思った？ 本当にこのテーマを君が本気で思っているなら、点数を上げるためにもっと勉強しているはずだよ。それとも努力せずに、簡単に成績を上げる方法でも見つけたいなんていう都合のいいことを考えている？」彼はニヤツとして、「ばれたか！」と小声でつぶやきました。

そこから対話が始まります。「君には好きなことはないの？」「人にこれを伝えたい、分かってほしいと思うことはないの？ それが他の人に褒められるかどうかなんてどうでもいいんだよ。」「14年生きてきて、これはおかしい、なんで～なんだと思うことはないの？」それは他者の眼から自由になり、自己を見つめるきっかけとなる問いです。

お手元には、保護者の高橋のぼるさんに描いていただいた漫画の冊子があるかと思います。高橋さんは5年間にわたり、卒研ボランティアとして9年生にアドバイスをしてくださっています。自分でテーマを見つけ、前向きに研究を進めていく生徒ばかりではありません。「どうせ自分なんて…」「…何をやってもつまらない」そんな生徒が毎年数人はいます。そんな生徒の相談に高橋さんは根気よくのってくれています。成績の良い生徒がテストの点数を気にしていないかという、それは違います。全く逆です。点数を気にし、劣等感を感じ、人の目を気にし、それでいて成績が伸びないのです。だったら勉強しろよと簡単には言えますが、これが難しいんです。どんどん内向きになり、本来のその生徒の良さが薄らいでいってしまいます。

高橋さんの漫画のテーマは、まさにここにあるのだと思います。「ボクは自分物語の主人公…」「ストーリーは自分でつくっていく」。勉強をしなくていいと言っているわけではありません。点数に縛られて本来の自分を見失ってほしくない、前向きに生きることで苦手な分野についても結果を恐れず挑戦できる。点数はもちろん大切です。でも、その先にもっと大切なものがある。これは教員自身もしっかり自覚しておかなければならないことだと思っています。漫画の後に、座談会の記事を掲載しました。併せて読んでいただければと思います。

#### 4. プロセスの大切さ

卒業研究で大切にしてきたのは、プロセスの大切さでした。「書く力を身につける」「プレゼン能力をつける」ことを目的とはしていません。もちろん結果として、そういう力がついてくれば嬉しい。ただ、それが目的化したとき、成果主義に陥った時、明星の卒業研究は別の方向に進んでいたでしょう。だからこそ、卒業研究は教科外の活動として実践してきました。1月の「卒業研究発表会」で発表される一人ひとりのプレゼンには、それぞれのドラマがあります。いわゆる結果としての優秀作品の発表ではないのです。そこにこそ、明星学園では何を大切にしているかをご理解いただけるのではないかと思います。今年度誕生した「総合探究科」の4つの科目は、数字による評価をつけません。評価を数字で表す他の教科ではできないことを、これらの授業で実践していきます。

数日前から、テレビをつけるとサッカーワールドカップの報道一色になっています。ついこの前までは日大アメフト部の危険タックルの問題が連日報道されていました。そして、レスリングの監督コーチの問題。報道されていることが事実であるならば、とんでもないことだとは思いますが。その根っこにあるのは結果主義、成果主義。でも、責任は彼らだけにあるのではないでしょう。その結果や成果によって評価する多くの眼です。一人ひとりの学生の心より、この多くの眼を意識したとき、悲劇は起こります。そして、こと教育においては、この問題は常につきまといまいます。偏差値を上げること、有名大学への合格者数を増やすことが目に見える学校評価としてはねかえってきます。その評価を無視するつもりはありません。もしそれが学校評価のためではなく、一人ひとりの夢の実現の結果だとするなら素晴らしいことです。でも、ここで申し上げたいのはそれが唯一の基準ではないにもかかわらず、最も分かりやすい基準として力を持ってしまっているという事実です。

明星学園中学校の教科の授業、そして「総合探究科」が目指すものは、この世間の眼への挑戦ともいえるのではないかと思います。

#### 5. 問うことの大切さ

「なぜ……か?」「どうすれば……か?」自分自身に問うということは、前向きに生きている証と言えるのではないのでしょうか。「どうせ自分なんて……」という状況の中で、問いは生まれません。問いを立てるということは、混とんとした状況を自分なりに整理し、より良い状況にしたいと考えるときに生まれます。そして思考が始まります。自己内対話です。

他者に問うとき、それは他者との対話を生むきっかけとなります。ただ、日本語において「なぜ?」「どうして?」と他者に問う形は、単なる愚痴や不平のまま終わっていることが多いように思います。一緒に「哲学対話」の授業を担当している廣畑さんによれば、英語では「Why…?」と尋ねられれば、必ず「Because…」という形のこたえが返ってきます。ところが日本語で「なぜ学校に行かなければならないの?」「どうして勉強しなければいけないの?」と子どもに問われた時、みなさんどのような答え方をされるのでしょうか。本気で答えようとするのでしょうか。子どもは答えを期待せず、ただ不満をぶつけているだけかもしれない。「どうせ大人だって、答えられないでしょ」。あるいは、本気で一緒に考えてほしいと思っている子どもは、大人のそんな姿勢に落胆するかもしれない。言葉が繋がっていかない。空気を読むのが得意、つまり自分の頭で思考することを積極的にしない人の方が、今の日本社会では生きやすかったりする。でも、それでよいのかということです。

良い聞き手に出会ったとき、良い語り手が生まれるように思います。しっかり耳を傾けてくれる人に対して、無責任な言葉はなかなかかけられません。と同時に、相手に届く問いとは何かということが問われます。問うことの大切さとともに、問いを問い直すことの大切さが求められるのです。ここにこそ、新教科「哲学対話」の意味があるように思います。

## 6. 哲学対話との出会い

私が初めて「哲学対話」に出会ったのは、2014年度の「明星学園秋の教室」でした。いくつもの講座の中に「哲学対話」の授業があったのです。講師は土屋陽介先生（当時立教大学）。他にも興味深い講座はあったのですが、何かに引き寄せられるように「哲学対話」の教室へと向かいました。参加資格は小中学生のみ。大人は参観のみです。受講生は4年生、7年生、来年高考を受験しようと考えている外部の中学生の数人。ここで私は大きな衝撃を受けたのです。4年生から中3まで、5年の年齢幅があるにもかかわらず、同じ土俵で深い対話が行われているのです。和やかながらものすごい緊張感です。相手の言葉を聞き、それにつなげる形で自分の考えを述べていきます。相手を否定するのではなく、共通点を見つけ、それでいて自分をきちんと主張している。土屋先生は司会役に徹しています。本当はそれが一番難しいのですが。この子たちはどんな能力を持っているのかと、恥ずかしながら目を見開かされました。

ただ、この講座も残り30分くらいになった時です。最後の問いは、参観している大人も一緒に対話しようということになったのです。ところが、一瞬にして対話の場が壊れてしまったのです。なぜだろうと思いました。たぶん、お母さん方は自分の知っている知識、しかもそれが絶対的に正しいという姿勢で子どもたちに語りだしたからだろうと思うのです。知っている、知らないの世界では対話は生まれません。一方的に教えてあげる、教えてもらうという世界です。そこに「哲学対話」の難しさと同時に、教科の授業では作ることはできない可能性を感じたわけです。

翌2015年、中学校の授業研究会に土屋先生を招き、7年生のクラスを対象に模擬授業と、「哲学対話」についてのレクチャーを全教員を前に行ってもらいました。おもしろい研究会になりましたが、教員らの心中は複雑だったのではないかと思います。「学校とはどういう場所か」「授業とは何を目的にするものか」、考えざるを得ません。「哲学対話」の研究会を実現したものの、新カリキュラムを提案するにはまだまだ時間が必要だと感じたのが正直なところです。

まずは自分自身が「哲学対話」を知らなければと思い、翌年は研修会に参加してみたりもしました。ファシリテーター役も、交代でやったりもしました。そこで気がつくわけです。ものすごく疲れる。自分には向いていない。ただ一方だと思うわけです。今までの経験から、自分が苦手だと思ったことに無理やり身を置いた時の方が面白い結果が起こったりするのです。

そして昨年、これも偶然でした。高校社会科の土屋教諭から11～12年合同の選択教科「哲学」を一緒にやらないかという話が舞い込んできました。それも「哲学対話」をやろうということなのです。昨年1年間は週1回2コマ連続の授業でしたが、本当に面白い経験をさせてもらいました。高校を含めて、明星学園という学校の自由さを感じます。

このような経緯もあり、石川教諭が国語科から一時的に総合探究科の責任者となり、先に挙げた4つの科目で2018年度より新カリキュラムがスタートするという提案が中学校職員会議で可決されたわけです。



## 7. 哲学対話とは

哲学対話とは、子どもたちの思考力を養うために 70 年代のアメリカにおいて「子どものための哲学」として始まったもののようです。哲学者の思想を教えるのではなく、身近な問いから出発してグループで一緒に考え、対話を深めていくものです。フランスなどヨーロッパ圏においては、必修の授業として位置づけられているところも多いようです。この授業の大切なポイントは「何を言ってもいい」、ただし「否定的なことは言わない」という二つのルールです。

「何を言ってもいい」というルールがない限り、対話は哲学的になっていきません。また、相手の意見を論破することを目的にするところからは、他者との相互理解は生まれません。その意味で「ディベート」とは全く性格を異にします。「哲学対話」は、勝ち負けではありません。一つの正解を決めることでもありません。他者を尊重することなしに、対話は成立しません。

それに比べ、一般的な学校空間とはどのような場所でしょうか？ 間違っただけを言えば、…笑われる。先生の意に添わなければ、…嫌われる。あるいは、嫌われるのではないかと不安になる。そのような場では生徒は、学びの当事者にはなれません。これは学校空間に限ったことではありません、一般社会においても同様です。だからこそ、忖度といった言葉が流行語になったりもするのでしょう。そのような空間では、本当の意味の「責任」というものが発生しません。「自由」と「責任」は、コインの裏表です。

「哲学対話」の空間は、そのような意味で「非学校空間」にならざるを得ません。「なんで学校に行かなければいけないの？」「なんで人を殺してはいけないの？」このような問いをめぐって自由な精神で対話する覚悟がないと、この授業は絵に描いた餅になってしまいます。

ただ、明星学園は授業の中で失敗することを良しとしてきました。それは恥ずかしいことではない。一つの間違えや勘違いから授業は活性化し、ダイナミックに展開していく。そんな授業を目指してきました。失敗しないことを良しとするのではなく、間違えたとしてもまずは自分の考えを持つこと、そこから思考が深まっていくと考えていました。こと明星学園においては、「哲学対話」を行う素地があるともいえるのです。

まだ 1 学期が終わったばかりですが、いくつか授業のエピソードをお話ししてみましょう。

- ① 2 回目の授業のことです。1 クラス 32 名が大きな一つの輪になって座りました。「哲学フルーツバスケット」です。輪の中央には一人の生徒が立ち、そこには問いが書かれ、折りたたまれた紙が 50 ほど箱に入れられています。中央の生徒が、その内の一つを取り出し、読み上げた上で自分の考えを述べます。「人生において恋愛は必要だと思いますか？」当の男子生徒は困惑気味です。でも、まず「はい」か「いいえ」で答え、その理由を言わなければなりません。「必要だと思います」。「いいえ」の人が一斉に立ち上がり、席を変えます。座り損ねた一人の女子生徒が、「いいえ」の理由を述べます。「恋愛なんて時間の無駄だと思います。すぐに終わっちゃうし」。そこから対話が始まります。「はい」の意見はどちらかというと常識的です。一方、「いいえ」の意見は面白く、ツッコミどころ満載です。

ある男子生徒が「いいえ」の意見を言い始めました。「恋愛なんてくだらないよ。井の頭公園にリア充とかいるけど、すごくムカつくよな。ネット見ると『リア充爆発』ってたくさん出てくるよ」。興奮気味に話すそのいい方に、少し引き気味の子もいます。すると、別の男子生徒が手を挙げました。「おまえさ、そんな言い方をすると、リア充のことが本当はうらやましいんじゃないの？」その後です。なんてこの子は素直なんだろうと思いま

した。「ああ、ばれた。実は小学校4年の時、告ったんだけど断られたんだ」。微妙な空気だったのが、一気に温かい空気になりました。すると別の男子生徒が一言いきました。「僕も最近告白したけど、ふられた!」。その瞬間、「フォローしてくれてありがとう!」思わず本音でしゃべりすぎてしまったと感じていた彼にとっては、救いの言葉だったのでしょう。

「はい」と「いいえ」で答えると、対立する考えになります。言葉の使い方を間違えると喧嘩になったりもします。日常生活では、両者は同じグループにあえて所属しないかもしれない。でも、やはり本音では多くが恋愛をしてみたい、あるいは夢を見たいという気持ちはある。でも現実思った通りにはいかない。それでいてヘンなプライドがあったりする。するとそれは屈折した言葉になったりする。SNSで飛び交っている「汚いことば」は、その結果であるような気がします。コミュニケーションのツールであるはずのツイッターやラインが真の対話へとつながっていかない。先の対話は、本音を出す中で相手の気持ちが理解できた良い例ではなかったかと思います。

- ② 同じく「哲学フルーツバスケット」。「誰も見ていないなら、赤信号を渡ってもいいか?」みなさん、どちらの意見に賛成しますか? 7年生はどう考えると思いますか? 実は、渡ってはいけないが圧倒的なんです。「ルールは守らなければいけない」「車は信号を守っているのだから、歩行者だって守らなければいけない」「もし車が猛スピードで来たら大変」……。一方、「渡っていい派」は数人だけ。でありながらそこには私を含め2人の教員が入っていました。面白いですね。生徒は「先生のくせにいいの?」という表情でこちらを見えています(笑)。「渡ってはいけない派」は、まさに正論です。ただ、正論の前には思考は停止してしまいます。「ルールは何のためにあるの?」「信号の前で一番大切なことは信号を守ることなの?」「信号は何のためにあるの?」「どんな場所か、どういう状況かによって判断は変わってくるんじゃないの?」「別の国だったらどうなんだろう?」次から次へと哲学的な問いが生まれてきます。

実は中学生というのは、きわめて道徳的な判断をする時期なのだと感じます。小学生はもっとかもしれません。純粋な彼らは、そうでない現実との間で大人不振になったり、自分の殻に閉じこもってしまったりすることがあるように思います。私は道徳的な正論は子どものうちに身につけておかなければならないと思っています。と同時に、「果たして本当にそうなの?」という問いをたて、思考を深める訓練が大切だと思うのです。

よく自分のクラスでは、特活の時間に生徒たち自身が話し合っ必要ことは決めることができているので、あえて「哲学対話」の授業をするまでもない、といった意見を聞くことができます。確かにそのクラスはその通りなのかもしれません。でも、全てがそうとは思えません。むしろ私はそんな言い方をする教員に危惧を覚えます。一人ひとりが自分の意見を言いつつ、一つの方向に収束し、クラスの決め事ができていくというのは極めて高度なことなのだと思います。プロの政治家が集まる国会の様子を見ても分かります。

特活の時間に、例えばクラスのもめ事を話し合おうとするとき、多くのクラスではまさに多数派の正論が幅を利かせてしまうのではないかと思うのです。そのときに少数意見が正当に取り上げられるだろうか。逆にそういう声が出ないような関係性ができあがったクラスが落ち着

いたクラスであると表面的に評価されたりする。うがった見方にすぎるでしょうか。

## 8. 常識を疑うことの大切さ

昨年まで、7年の国語Bの授業(週1コマ)を担当していました。1年を通し、「名言を探せ！」と称し、私が探した名言を紹介したり、逆に生徒から紹介してもらったりしました。次の3つの文の( )の部分に入る言葉を探してみてください。

A 『正義の反対は悪なんかじゃないんだ。正義の反対は( )なんだよ。』  
<クレヨンしんちゃん父、野原ひろし>

B 『正論は正しい。だが、正論を( )にする奴は正しくない。』  
<『図書館戦争』有川浩>

次は、数年前生徒が持ってきた名文です。

C 『「せいぎ せいぎ せいぎ せいぎ……」と歌っていたら、その中にたくさんの( )があったのです。』  
<SEKAOWA FUKASE>

何が入ると思いますか。授業の中では原作を超える名文を完成してみようと声かけするのですが、いろんな言葉が出てきます。そして7年生のどのクラスでも、原作の言葉とほぼ同じ意味の言葉を見つける生徒が出てきます。Aは(また別の正義)、Bは(武器)、Cは(犠牲)。正論を知ったうえで、その先にあるものを思考しようとするとき、より深いところに行けるように思うのです。

「正義」という言葉が使われるとき、常にその背景を考えてしまいます。誰にとっての正義なのか？ 全ての人にとっての正義とは？

お手元の新聞記事をご覧ください。2014年12月2日、朝日新聞の夕刊文化面に載っていた記事です。タイトルには『桃太郎と教科書 知的な反抗精神養って 池澤夏樹』とあります。それ以前に、前衆議院議員の義家弘弘さんが、筑摩の高校教科書「国語I」に収録されている池澤さんのエッセー『狩猟民の心』について、<これは子供たちに供するにふさわしくない>と発言したことへの、表向き遠慮がちな、でも実は痛烈な反論という形の文章なんです。まずは、義家さんが指摘する池澤さんの文章を読みます。

《日本人の(略)心性を最もよく表現している物語は何か。ぼくはそれは「桃太郎」だと思う。あれは一方的な征伐の話だ。鬼は最初から鬼と規定されているのであって、桃太郎一族に害をなしたわけではない。しかも桃太郎と一緒に行くのは友人でも同志でもなくて、黍団子というあやしげな給料で雇われた傭兵なのだ。更に言えば、彼らはすべて士官である桃太郎よりも人間以下の兵卒として(略)、動物という限定的な身分を与えられている。彼らは鬼ヶ島を攻撃し、征服し、略奪して戻る。この話には侵略戦争の思想以外のものは何もない》

ここからは義家さんの意見です。

《わが国では思想及び良心の自由、表現の自由が保障されている。作者が作家としてどのよ

うな表現で思想を開陳しようとも、法に触れない限り自由である。しかし、おそらく伝統的な日本人なら誰もが啞然とするであろう一方的な思想と見解が、公教育で用いる教科書の検定を堂々と通過して、子供たちの元に届けられた、という事実には私は驚きを隠せない。／ 例えばこの単元を用いて、偏向した考えを持つ教師が「日本人の心性とは、どのようなものであると筆者は指摘しているか、漢字4字で書きなさい」などという問題を作成したら一体どうなるか。生徒たちは「侵略戦争」と答えるしかないだろう。》

皆さんはどのような立場をとられるのでしょうか。日本がどういう国かという問題ではありません。大切なのは、視点を変えた時、一つの現実が全く異なる様相として現れるという驚きです。「名文を探せ」で紹介した「正義の反対は、また別の正義」です。文学教育の最も大切なことは、この「視点」「語り」の問題にあると私は考えています。思想を教えることではありません。感動を経験させることが第一でもありません。文学は人の心を揺さぶります。感情移入を経験することができ、感動をさせることも可能です。ある方向に生徒を導いてしまう危険性を併せ持っています。だからこそ、文学教育では、一方で批評する力を身につけさせることが求められます。まさに「考える自由」を授業場で教師も生徒も持っていなければなりません。

池澤さんは次のようにこの文章をしめくくっています。

《教育というのは生徒の頭に官製の思想を注入することではない。(略)一つのテーマに対していかに異論を立てるか、知的な反抗精神を養うのが教育の本義だ。ぼくの桃太郎論を読んだ生徒が反発してくれればくれるだけ、ぼくは嬉しい。》

この文章(教材)で、生徒に何を考えさせるか。問われるのは授業者の側です。「探究」的な授業は、緻密な教材研究、授業研究なしには生まれません。数年前、評判になった広告があります。泣いている鬼の子の絵の上に「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました」という子どもの字で書かれたコピーがありました。痛烈な批評です。

## 9. 探究の芽を育ててくれる小学校「みつけた」の実践

先日、私学紹介サイト「ココロコミュEAST」に卒業生(4人の大学生)のインタビュー記事が掲載されました。4人のうち3人が小学校からの内部生です。彼らは小中学校時代を振り返り、こんな話をしているんです。<小学校のころの「みつけた」が忘れられないですね。…毎朝、誰かが見つけたものを発表するんです>。<「みつけた」はヤバイです。大好き！今でも自分のエッセイを「みつけた」の要領で書いてますから。「みつけた」は、目線を変えてくれて、いつもの風景が全く違って見えるんです>。<ちょっとした自分の発見や気づきに、先生が「あなたしか見つけられなかった」と言ってくれて、価値を認めてくれるんです。そして「私しかない」「天才だ」と思わせてくれる(笑)>。

ここに私は「探究」の芽を感じます。発見の喜び。人に伝えたいという衝動。人に聞いてもらえたという満足感。もっと調べてみたいという欲求。「探究」などと大げさに言うまでもなく、子どもなら本来持っているはずの欲求こそが「探究」の源泉なのだと思います。明星学園の小学校は、それを長年にわたり大切にしてきたのだと思います。

3週間ほど前のことです。受験広報サイト「読売中学受験サポート」の方が7年の「哲学対話」「図書館と情報」の授業を参観、取材してくれました。全員が輪になって生徒が次から次

へと発言し、対話する様子に驚かれ、実際に生徒さんに話を聞きたいということで、昼休みに2人の生徒に職員室まで来てもらいました。「このような対話の授業、どう思いますか？ 他の授業と全然違うでしょう」という問いかけに、2人はきっぱりと「僕たち、こういう授業に慣れているんです。他の人の意見を聞き、自分の考えを述べるというの好きなんです」。

自分の考えを述べるということは、失敗する可能性だってあるんです。恥をかくのではないかと不安だってあるはずですが。皆はどう思っているんだろうとまずは気になります。それでも、自分の考えを述べるということそのものに価値を認められてきた子どもは強いですね。他の生徒の意見を聞いて、自分の最初の考えを変えることにも躊躇はないです。勝ち負けではなく、自分に固執するでもなく、考えることそのものを楽しもうとしているわけですから。7年1学期の段階では、「哲学対話」の授業でも、小学校からの内部生が主に活躍し、それにつられるように外部生も面白い個性を發揮してくれたりしています。

もちろん思春期の中学生、全員がそうできるわけではありません。でも、そういうスタイルに慣れている内部生が、素直に自分を出し活躍してくれると教室は安定します。不安だった外部生も、自分も失敗してもいいんだ、間違えに気づいたらすぐにそれを認めればいいんだという雰囲気になります。そして3年後、内部生外部生の区別なく、彼らは同じ内部生として高校に進学していきます。

もう一度、インタビューに協力してくれた大学生の話に戻ります。彼らはこんな言葉で明星学園を語ってくれました。<明星は、変＝「ダメ」じゃなくて、変＝「かっこいい」という世界><子どもは天井知らずってことを、先生が信じてくれている><明星では、自分らしさを育てるとき1人っきりにならない><好きだから取り組んで、幸せな気持ちになって生きる><自分が好きなことや正しいと思えることをちゃんとと言える>

こう読んでいて気恥ずかしくなってしまうます。本当にそうできているかと問われれば、心もとないばかりですが、多くの卒業生にそう思ってもらえる学校でありたいと願っています。

## 10. 探究の芽の成長を阻むもの、そしてそれを克服するための中学校としての取り組み

先ほど、探究する素地は本来子どもなら持っているものだと述べました。しかし、自我に目覚めるころからさまざまな阻害因子が生まれてきます。人の言葉に傷ついたり、他者からの評価で自信を失ったりします。安全な自分の小さな世界に身を置き、そこで満足しようとするタイプの生徒がでてきます。でも、それでは傷つかないかわりに他者に会えることができず、自分の世界を広げていくチャンスを失ってしまいます。また、「どうせ…」が口癖になり、あるいは言葉を発せずネガティブな思考におちいってしまうタイプの生徒もいます。その結果、責任のない子どもの立ち位置に立ったまま大人を批判（消極的な意味の批判も含めてですが）するようになります。大人を批判しつつ、自分では判断、行動ができない状況です。さらに、夢を持っているにもかかわらず、行動に移すことのできない生徒は多くいるでしょう。失敗することが怖かったり、夢を実現していくための方法がまだ見えないのでしょう。

誤解されてしまうと困るのですが、だから大変だということを言いたいわけではありません。ある意味、この時期そうなるのは当たり前なのです。成長のための1ステップだとさえ思っています。だとすれば、それを認識したうえでこの時期の生徒に何を与え、どんな経験をさせるかということが問題になってきます。

現在中学校では、自分と向き合うためのきっかけ作りを意識的に作っています。学校生活の

骨格をなす教科の授業については後ほど触れますが、まずは教科外の活動について紹介します。点数で評価することのない取り組みです。7年八ヶ岳行事では大きな自然に出会わせます。体力のある子もない子がグループ単位で、2,899mの最高峰赤岳に登るのです。8年の職場体験では、親でも先生でもない「仕事をする大人」に出会わせます。そこでは「生徒」「子ども」のままではられません。9年の修学旅行では、4泊のうち2泊3日を、民家泊にあてています。日常とは異なる地域、文化を持った家庭に入り、かけがえのない経験をして戻ってきます。どの行事も学校としての覚悟がない限り、できないものです。

夏休み中は有志ではありますが、タイやオーストラリアへの短期留学があります。近年中学校では、参加者も増え、さらに関心が高まってきているようです。そしてお手元にある冊子「この人に会いたい」をご覧ください。社会の一線で活躍する「おとな」をお招きし、実施した特別授業についての報告（中学校ニュース）をホームページのリニューアルを機にまとめたものです。この企画は学校がカリキュラムとして実施しているものではありません。学年の教員や生徒から出てきた声が実現していきます。定期的にこのような授業を企画することができるというのは、一人ひとりの教員が目の前にいる生徒と真摯に向き合い、その時々によどのような出会いを彼らにプレゼントしようかと常にアンテナを張っている証であろうと思います。

まだまだ将来の見えない中学時代だからこそ、すぐに結果として形となるものではない経験を、知的な刺激をシャワーのように浴びてほしいと思っています。

## 11. 明星学園中学校の授業

### ① 国語の授業—語り手と視点

「総合探究科」の話と言いながら、それが生まれるこれまでの取り組みを教科外の面でお話ししてきましたが、最も申し上げたいことは、明星学園という学校は教科教育の中でこそ探究的な学びを目指してきたということです。しかし、説明のなかなか難しいところです。今日は私の視点で少しだけお話しできればと思います。

現在、国語の検定教科書から文学教材が大幅に減少しています。読書教材として、短時間で扱われるようにもなっています。高校のカリキュラムも大きく変わり、これまで高校生として多くの生徒が学んでいた漱石や鴉外に接することなく高校を卒業していく生徒が今後増えていくことになるでしょう。

そこで改めて私は国語教育における文学の意味を考えるわけです。なぜ教室の中で、全員で一つの作品を読むのか。個で楽しむのではなく、共同で読むことの意味は何か。それは対話が生まれるからです。多様な読みが現れるからです。その時、再びテキストに戻って確認しようとする学びの姿勢が求められます。時間のかかることです。手間のかかることです。最終的に一つの正解にたどり着くとは限りません。これこそが、探究的な学びであるはずですが。文科省でも世間でも、「多様性」「主体性」という言葉が叫ばれているにもかかわらず、実態は逆の方向への流れが加速度的に進んでいるとしか思えません。もちろん、対話を生まない文学教育、共感や感動のみの授業の危険性は意識しなければなりません。しかし、挑戦してみる価値は十分あると思うのです。そこから逃げてしまうのは国語の教師として本当にもったいないことだと思います。人間の心の多様さを知ることは、自分と人との違いを知ることであり、ひいては他者に対する寛容にもつながっていきます。そうなるような文学教育とは何かということが再び問われます。

中学校での文学教育で大切にしていることのひとつは、「語り」「視点」の問題です。まさに先ほどご紹介した池澤夏樹氏の「桃太郎」の問題です。ある一つの同じ現象が、違う視点から見たとき全く異なるものとして見えるということ。「物語」には、必ずその物語を語っている語り手がいます。それは「私」かもしれない。あるいは、全てを見通すことのできる神のような存在の語り手かもしれない。いずれにしろ、一つの視点がない限り秩序ある世界を表現することはできないわけです。

中1の定番教材にヘルマン・ヘッセの『少年の日の思い出』があります。全ての検定教科書に収録されているため皆さんご存知かと思います。少年時代、チョウの収集に夢中になるあまり、隣の子の大切なチョウを盗み、誤って壊してしまう物語です。われに返って彼は、謝りに行くわけですが、隣の子エーミールはただ彼を軽蔑するだけ。怒ることも許すこともしてくれない。大人になった彼が少年時代のこの出来事を友人に語るという設定です。語り手である彼に感情移入すれば、隣の子エーミールはなんて人の気持ちを理解できない奴なんだと感じるはずです。事実多くの生徒がそう読んでいきます。そこで、こんな課題を出してみます。語り手を隣の子エーミールにして、つまりエーミールがぼくとなってこの出来事を語ったらどうなるか。

生徒たちは想像力を発揮していきます。勝手な想像ではありません。根拠のない想像ではありません。今まで何気なく読んでいた一つの言葉が深い意味を持ったものとして動き始めます。二つの視点のずれから、善と悪ではわりきることのできない人間の心、表面とは違う人間の弱さ、それでいてその弱さがけしてネガティブなものとしてではなく読み直されていく…。

もう一つ、その発展として8年生では太宰治の『走れメロス』を学習します。その実践については、『明星の教育—中学校実践報告—2011』に詳しいですが、今でも私にとって忘れられない授業になっています。この単元でも最後に「この物語を王様の一人称小説に書き直しなさい」という課題を出しました。メロスが善で、王様は悪なのか。そんな単純な物語であれば、中学生の国語の教材としての価値は小さいでしょう。王様が自分の苦しい心の内を語ったらどうなるか。王の眉間には深いしわが刻まれている。なぜ自分の大切なはずの身近な者、信頼していたはずの賢臣から殺していくのか。ただの「邪知暴虐」という言葉だけでは表せない内面に迫らせたいと思うのです。その時、「こんなのきれいごとだよ」「ありっこないよ」と感じていたであろう生徒の目が変わります。人を信じたいけれど信じることができない。実は、メロスの内面より王様の内面の方がどれだけ深く、現代の人間の問題とつながっているかと思います。

## ② 国語の授業の持つ意味—複数の眼を持つということ

国語は「ことば」を学ぶ教科です。そんなことに改めて気づかされてくれたのは、数年前、小中公開研での全体会講師としてお願いした、詩人のアーサー・ビナードさんのお話でした。

「ことばはレンズである。英語のレンズで見えていたとき見えなかったものが、漢字を学び、日本語を話すようになった時に見えてきた。新しい発見があった。・・・」ご自身の体験をユーモアたっぷりに話し始めてくれました。「言葉を教えるというのは本当に大切。技術を教えることも大切。でも、そのことによって見えなくなるものがある。世界を狭め

てしまうことがある。本当に大事なことはことばのむこうにあるものに、思いをはせること。・・・」

広島や長崎の問題がアメリカの教科書ではどう教えられているかという話がありました。自由で正義の国アメリカが、原子爆弾によって戦争を終わらせ、両国の戦死者をそれ以上増やさなかったという構図。それがあたりまえのこととして信じられていたこと。アーサーさんは日本語を学び、日本語のレンズでそれをながめ、原爆の落とされる数か月前の東京大空襲のことを知ったとき、さまざまな疑問がわいてきたといいます。それを一つ一つ調べていくうちに、気づいたそこに隠れていた欺瞞。「なぜ東京の中核ではなく、一般庶民の住んでいる下町に、それもわざわざ逃げ場のないように焼夷弾を落としたのか？」「なぜわざわざ戦争を長引かせるようなことをしたのか？」地図を見ることの大切さ、その場所に足を運ぶことの大切さを語ります。広島の人ほだれ一人『キノコ雲』などとは言わないそうです。「私が日本に来た当時、出会った広島に被爆者はみんな『ピカ』というんです。『ピカドン』という人もいました。東京の人はそんな言葉を使ってはいなかった。それは原爆にどこであったかの違いなんです。」爆心地付近にいた人。そこから数キロ離れたところにいる人。そんな地獄の中にいる人が『キノコ雲』など見ることができないこと。きれいな『キノコ雲』を見ることができるのは、地上で何が起きているか想像することすらできない「エノラ・ゲイ」の乗組員の眼から見たことばであること。「どのことばを使うかによって、無意識のうちに立ち位置が決まってしまうんです。」「ベトナム戦争の時、それまで使われていた『焼夷弾』ということばが日本の新聞から消え去り、『ナパーム弾』ということばに取って代わったのはなぜか？」

ことばの大切さと、怖さ。それを自覚した上でことばの教育。時に違うレンズでもものを見ることの重要性。いったん自らのレンズを外してみることの勇気。これは国語教育のみならず、英語、社会科、全ての教科に共通する重要な問題意識だと思います。

### ③ 国語の授業—対話の生まれるとき

昨年まで7年生対象に週1コマ「国語B」という授業を持っていました。新年度の授業開きでは、国語を学ぶ意味について語ります。その時、黒板に二つの文を書きます。

- A (前の学校では) 言葉はナイフだった。
- B (今の学校では) 言葉はバンソウコウだ。

「どのような意味だろう？」と問うわけです。重松清の『君の友だち』「千羽鶴」の中にある文です。どのクラスでもすぐに手が挙がります。Aは、「言葉は人の心を傷つけるもの」「暴言を言われたのかなあ」「いじめられたんじゃないのかな」。Bは、「言葉は心の傷を治してくれる」「やさしい言葉は癒しだよ」。こちらが想定した通りの答えです。「ナイフとバンソウコウは比喩表現だよ」「AとBは、対比の関係になっている」。こんな発言の出てくるクラスもあります。

その上で語るわけです。言葉がなければ人間の悩みはどれだけ少なくなるのか、と同時にどれだけ喜びも消えてしまうことか。人間として生まれた以上、言葉なしに生きていくことはできない。ナイフは使い方ひとつで危険にも便利なものにもなる。ある意味、ナイフの発明は人間の進化にとって大きな意味を持っているだろう。同じように言葉の使



い方を学ぶことは人生を豊かにすることに繋がっていく。

ところが、あるクラスでそんな話をしようと思ったとき、男子生徒の小さなつぶやきが聞こえてきたのです。「バンソウコウで傷が治るわけじゃないよ!」。小さな声でした。誰かに伝えようとしてというより、どこか斜に構えた投げやりな言い方でもありました。他の生徒もそれに気をとめているようにも見えません。スルーすることも可能です。でも、この想定外のつぶやきが引っ掛かりました。「バンソウコウでは傷は治らない?」口に出し、しばらくその意味を考えていました。すると生徒たちが一緒に考えだしたのです。「たしかにバンソウコウで傷が治るわけじゃない」「傷を守っているだけ?」「傷を見えないように隠しているんじゃないの?」すると、さっきまで斜に構えていた男子生徒が姿勢を正したのです。彼もまた他の生徒の意見に耳を傾け始めました。「傷を治すのは、バンソウコウなんかじゃなくて、その人自身の身体でしょ!」「自然治癒力ってやつ?」「その人が自分で治そうとしなければ治らないんだよ」。

この対話は、まさに重松の「千羽鶴」のテーマに繋がります。その作品を読んでいるわけでもないのに、中1のそれも4月の最初の授業でそれが行われたということは驚きでした。と同時に、作品の一部を自分の都合のいいように引用して、いかにももっともそんなことを言おうとしていた自分を恥じることになりました。

このエピソードから思うことは、授業者が教室で生徒と共に考えることの大切さです。常に教員が正解を持っていて、それを生徒に伝える授業ではこのようなことは生まれません。生徒は教師が答えてほしいと思うことを読みながら発言するようになるでしょう。そして、そんな欺瞞を感じてしまう感性の豊かな生徒は、授業なんてそんなものでしょうと無力感を感じてしまうにちがいないのです。

#### ④ 美術の授業—ものの見方を教える

中学校では、定期的の一つの授業を教員全員で参観し、検討会を持つ「授業研究会」を実施しています。他の教科の授業を知る機会でもあり、自分の教科との共通点を感じる絶好の場にもなっています。

その日は7年の美術、授業者は吉野教諭です。明星の美術の授業では、「見て描く」「イメージを絵にする」「模様・デザイン」の3つの領域が用意されていますが、そのうちの「見て描く」=『一本のピンを描く』が今回の課題です。一般的な美術の授業では「見たとおり描けばいいんです」という指示がよく出されます。その実、立体を平面にうつすことは生徒にとってなかなか困難なことです。うまく形をとれない生徒の絵を称して、「そう見えるんだから」「その子の個性を尊重して」という言い方をする人たちがいます。また、それとは全く反対の立場に立ち、「技術指導」の重要性を述べる人たちがいます。しかし、明星の美術の授業を見ていていつも思うことは、「見る眼」を育てているということです。

その時の授業を参観していて驚いたのは、例年になく正確に形の取れている生徒が多かったことでした。自分の描いている絵を友達に持ってもらって、少し離れたところから実際のピンと比較している生徒がいます。《ピンを描かせると、子どもたちはしばしばラベルは四角、ピンの底は平ら・・・と、目の前にあるものを観察した結果ではなく、それぞれが知っていること、思い込んでいることを描いていく(吉野)》 そのような思い込み

から自由にさせることが「見る眼」を育てることなのでしょう。そのためにはどんな働きかけをし、何を意識させ、自ら気づくようにさせるか？

私はその授業の工夫をこんな風感じました。①ピンをいろんな方向から、たとえば真上から、真横から、斜め上からといったようにことあるごとに意識的に観察させている。②等間隔に数本の輪ゴムをはめた透明の円柱パイプを用意し、目の位置（視点）によって輪ゴムがどのような形になるかを観察させている。③影を描かせることで、光の方向を意識させる。そして何よりも「やるな」と思わされたのは、生徒の描いている絵の裏に細かなコメントの書いてある付箋が貼ってあったことです。美術の授業では当然生徒は個人的なアドバイスを求めます。授業者は必死にそれに対応しますが、1人の教師に30人以上の生徒、どんなに頑張っても生徒の不満は残ります。吉野教諭は、次の授業までに全員の生徒にコメントを書いていると言います。

ここでも「視点」という言葉が出てきました。十数年前になるのでしょうか。私には忘れられない二つの作品があります。その前に少し説明させていただくと、毎年9年美術の卒業制作のテーマは『都市を描く』です。生徒は自分なりの都市を描きます。街に出てさまざまな写真を撮る生徒がいます。これはと思う雑誌の記事を切り抜き、スケッチブックに貼っている生徒もいます。そうして出来上がった作品は、卒業式の日、会場となる体育館に木工・工芸の作品とともに展示されます。そこに貼り出されていた2枚の絵、どちらもホームレスの段ボールの小屋を描いたものでした。ちょうど10代の少年によるホームレス襲撃の事件が問題になっていたころだったのでしょうか。1枚の絵は、高台から見たホームレスの段ボール小屋の立ち並ぶ風景。もう一枚は、段ボールの小屋の中から見える、街中を足早に通り過ぎていくサラリーマンや学生の足。彼は、実際に段ボール小屋を作り、その中に入って街を観察したようです。段ボール小屋を描きながら異なる二つの視点の絵です。前者は、現代日本の格差社会を描いています。後者は、何が普通なのか、何が正常なのかの批評を含んでいるように私は感じました。

国語の授業と同じです。授業の中では当然1時間1時間の中に、その單元ごとに学ぶべきもの、できるようにならなければならないことがあります。でも、大事なものはその先にあるものです。単なる資格や表面的な成績ではない、生きていく上で大切なものがその授業とどうつながっているかということ、授業者は意識していないといけないと思うのです。

## ⑤ 数学の授業—「？」から「！」へ

数週間前のことです。学校見学で訪れた方を案内していました。中学校校舎をまわりながら廊下から教室の中の中学生の様子を見てもらっています。2階の廊下に出てみると扉の開いている教室があります。せっかくなので教室の中に入ってみました。数学の授業です。

『cm』は、何を表す単位ですか？ — 「長さ！」

『cm<sup>2</sup>』は、何を表す単位ですか？ — 「面積！」

「では、4 cm<sup>2</sup>の面積の正方形を作図できるね？ 9 cm<sup>2</sup>の正方形はどうか？」

先生が作図するための用紙を配ると、早速生徒は作業に取り掛かります。その様子を見

ながら私たちは教室を後にしました。

次の休み時間のことです。授業者の中西教諭から声をかけられました。「もう少し見ていてくれたらよかったのに！」 どうも私たちが見たものは授業の導入で、小学生でもできる問題だということです。実は、この授業での本当の課題は、「 $13\text{ cm}^2$ の正方形を作図なさい」というものだったようです。格段に難しくなります。2乗して13になるのは…と、計算を始めてみました。3と4の間。3.6と3.7の間。実は生徒もそういう計算を始めたそうです。中にはもっと先まで計算する生徒もいるということです。そんな生徒に授業者は、「でも、そんな細かい数字を作図できる定規はないよね！」と言います。私も頭を抱えました。そこで、彼にそれまでの授業のノート記録を見せてくれるように頼みました。そして「なるほど！」と思うわけです。「これを使えばいいのか！」教室の中でだれが最初に気づくのか。たぶんその発言で多くの生徒が「？」から「！」に変わると思うのです。

今日は時間がありませんので、解答は割愛させていただきます（笑）。皆さん、考えてみてください。ヒントは、 $4 \cdot 9 \cdot 13$ という数字です。そしてこの授業は、結果としてピタゴラスの定理を発見するプロセスを体験することになるのだと思います。公式を覚えて、それに当てはめて演習を繰り返す学びとは全く別の学びがここにあるように感じました。

## 12. 「総合探究」の授業の持つ意味 / 終わりに

教科の授業というのは、なるほど教室という決められた空間があり、机と椅子に生徒が座っているという不思議な環境の中にあって、授業者が一斉に多数の生徒を相手にするには、ある意味とてもやりやすい。学ぶ対象がはっきり決められていて、教員にとっては教えるべき内容が明確になっている。そういう枠があるからこそ、安心して考えること、発見することを追求できるわけです。ただ、それを最大限模索している明星学園のような学校は少ないし、それこそが明星学園の存在理由であると思うのです。

と同時に、問いを与えられるのではなく自ら問いを立て、それを追究していく、問いそのものを問い直す「総合探究科」の意味は大きいと思うのです。たぶん明星の「各教科の授業」と「総合探究科」は別物ではなく、互いにプラスに作用しあう関係になるのではないかと期待しているところです。

話があちこちへと飛び、まとまりのないものになってしまいましたが、「総合探究科」の各科目について、あるいは明星学園中学校の各教科の授業について、改めて関心を持っていただければ嬉しく思います。今回は、そのための前座の役割としてお話しさせていただきました。第2回以降の「トーク&スタディ」では、具体的な授業の話をも明星の理念や理想と絡めながら現場の教員にしてもらいたいと思っています。

私は若いころ、保護者の方から「国語って何を学ぶ教科なんですか？」「この作品を教材として選んだ理由は何ですか？」「なぜ『日本語』ではなく、『国語』という教科名なんですか？」と、しばしば問われました。うまくなど答えることはできません。しかし、こういう質問は忘れずに、30年以上たった今でも覚えているし、考え続けています。このような質問を先生たちにしてください（笑）。喜んで答える人、うまく答えられない人（私がそうであったように）、その反応はさまざまですが、そういう問いが教員を育てるのだと思います。その質問者が学校や教員を批判しているわけではなく、自分自身が学ぼう、成長しよう

としているのを若いながらに私は感じていました。そこには信頼関係があったのだと思います。本当に大切な問いというものは、すぐに答えが出ない。そつなく気の利いた返答をする教員が良い教員であるとは私は思いません。大切な問いとしっかり向き合う（とても厳しいことです、エネルギーのいることです）、常に考え続ける教員でありたいと考えてきました。

最後に、一昨年の中公開研の全体会で講演して頂いた中村桂子さん（JT生命誌研究館館長）のお話の中から印象に残るいくつかの言葉を紹介させてください。

《生きものの中には違いはあっても格差はない。一本の線で並べて比べるから格差が生まれる。》学校での評価は、とかく数字になりがちです。もちろん評価の数値化も必要かもしれませんが。問題なのは評価の線が一本だけではなく、何本もあることだと思います。

《多様性がこの世界を支えている。…今の世の中は、○か×かの世界になっている。たしかに○か×かで判断することは楽。でも、生きるということは○か×かではない。》教育の世界もまさに同じだと思います。○か×かという楽な方に流されるのを自戒しながら、そのはざままで我々は戦っているのだと思います。そこが教育の難しさであると同時に面白さなのですが。

《現代の機械論的世界観を生き物的世界観に捉え直したい。機械の特徴は、早くできる・手が抜ける・思い通りにできる。でも、生き物にとって早くできることには意味はない。思い通りにいかないのはあたりまえ。でも、思いがけないところに面白さがある。手を抜くのではなく、手をかけるところに喜びがある。》

学校教育の中にあって「総合探究科」を、そして明星の各授業を、現代を生きつつも「生き物的世界観」を志向するものとして捉えることを忘れてはいけないと、最後に自戒を込めて確認しておきたいと思います。

長時間にわたり、ご傾聴ありがとうございました。



## 明星学園は 2024 年に 100 周年。皆さまの一層のご支援を！

ささえる会への入会は学園の支援につながります。

ぜひ皆さまのお知り合いをお誘いください。

また、毎年の会員継続もお願いいたします。

### ■年会費の振込先

①郵便局 記号 10130 番号 78862471

②三菱UFJ銀行 吉祥寺支店 普通預金 0876444

③所定の郵便局振込用紙もご利用いただけます。

- ※ 入会金なし、年会費は 2,000 円以上、おいくらでも歓迎です。
- ※ 新規入会される方は入金ほかに、入会申込手続きもお願いします。入会申込はホームページの入会フォームから行えます。紙の申込書をご希望の方はご一報ください。
- ※ 会費をご入金くださった方には、4 月に 2019 年度カレンダーをお送りします。
- ※ ご家族など 2 名以上の会費を振込用紙で入金される場合は、1 枚の用紙にまとめて、連名でお振込みいただくと助かります。
- ※ ①、②の口座から振り込まれる場合、お分かりになる方はお名前の後に会員番号を入力してください。
- ※ カレンダーが届かない場合は、お手数ですが当会事務室までご一報ください。  
(2019 年度カレンダーは 4 月上旬に完成・お届け予定です)



**明星学園をささえる会 会報 No.2 別冊**

2018年12月18日発行

編集者 明星学園をささえる会（後援会）

発行者 加藤結花

発行所

東京都三鷹市井の頭5-7-7 明星学園内

明星学園をささえる会事務室

電話・FAX 0422-49-8750

Eメール [sasaeru@myojo.moo.jp](mailto:sasaeru@myojo.moo.jp)